

要覧

水産庁

南西海区水産研究所



1989. 1

〒739-04 広島県佐伯郡大野町丸石2-17-5

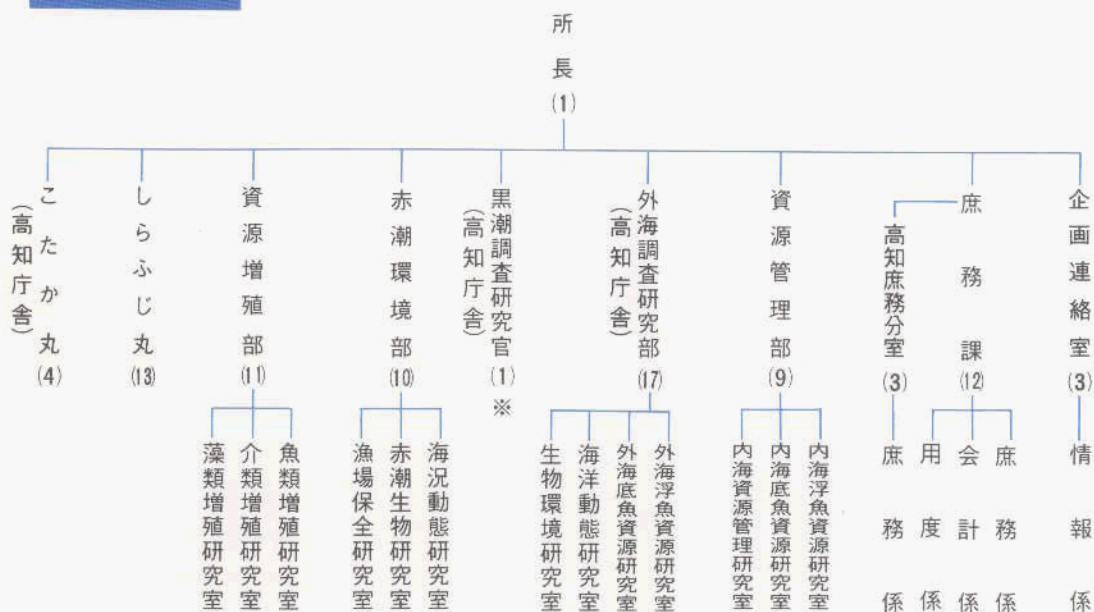
電話 0829-55-0666(代)

テレファックス 0829-54-1216

沿革

- 昭和24年6月** 水産試験場が廃止され、8つの海区水産研究所が設立された。瀬戸内海区を担当する内海区水産研究所が広島市に、太平洋南区を担当する南海区水産研究所が高知市に設置された。
- 昭和42年8月** 内海区水産研究所と南海区水産研究所が廃止され、瀬戸内海及び太平洋南区を担当する水産研究機関として南西海区水産研究所が広島市に設置された。内海区水産研究所の全部門と南海区水産研究所の沿岸漁業資源担当部門とが統合され、4つの研究部に再組織された。内海資源部と増殖部は広島市に、外海資源部と海洋部は高知市にそれぞれの庁舎をおいた。
- 昭和43年4月** 試験研究分野の拡大と総合調整の必要の増大に伴い企画連絡室が新設された。
- 昭和45年6月** 南西海区水産研究所広島庁舎は広島県佐伯郡大野町に移設された。
- 昭和47年5月** 沖縄県が南西海区に加えられた。
- 昭和54年4月** 赤潮部が広島庁舎に増設された。
- 昭和63年4月** 組織改正により、内海資源部が資源管理部に、外海資源部が外海調査研究部に、赤潮部が赤潮環境部に、増殖部が資源増殖部に改組され、新たに黒潮調査研究官を新設し、海洋部が廃止された。

組織



〔注〕 ()の数字は昭和63年12月現在の実員、総数83名

※は併任

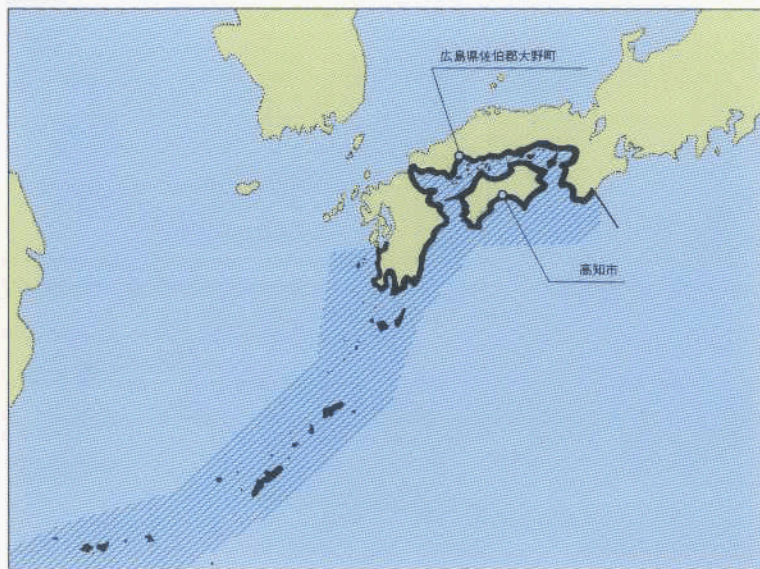
研究の概要

当研究所の担当水域は1府14県の沿岸・沖合に及ぶ。その範囲は広いのみでなくその中には瀬戸内海と黒潮流域という地勢でも、社会的条件でも著しい特色をもつ2つの海域を含んでいる。瀬戸内海は浅く、河川の流入も多く大きな生物生産を擁している上に、古くから発達した大消費地をひかえ、多様な漁業・養殖業が発達していて1km²当り35—40トンというわが国沿岸漁場の数倍に当る生産をあげている。近年に至って産業、都市の発展に伴う沿岸域の埋立て、水の汚染・富栄養化が漁業・養殖業を経営する上で大きな障害となりつつある。環境条件はきびしくなったが生産量はいぜん高い水準にある。

紀伊半島から四国・九州を経て南西諸島に至る水域では黒潮の消長が漁業・養殖業対象生物の分布量に著しい影響を与えてきた。ここでも市場の拡大に支えられて生産は増加を続けている。しかもこの海域は、わが国漁獲量の $\frac{1}{3}$ をこえるイワシ、サバ等の主産卵場、カツオ、マグロの来遊路となっているし、わが国の中では黒潮の最上流域でもある。そこにおける海洋の変動、浮魚の産卵・来遊の成否はわが国太平洋沿岸の水産業の動向を予測するための鍵となっている。

近年要請されている基本的な研究問題は、生産の基盤となる漁場、養殖場及び関連水域の環境変動の予測と管理、漁業対象資源の評価・予測・管理技術の開発・改善、有用種の増養殖・培養技術の開発・改善である。これを基盤として当海区の漁業・養殖業を維持発展させるための総合研究が行われている。その一方で当海区で進められている大規模な建設プロジェクト、工業化、都市化の下で漁業・養殖業の環境の維持を目指す研究が行われている。

担当海域

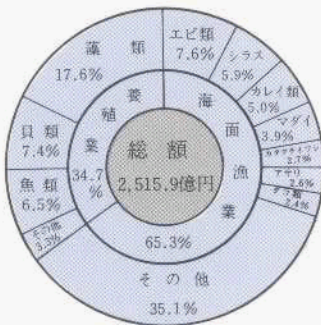


資源管理部

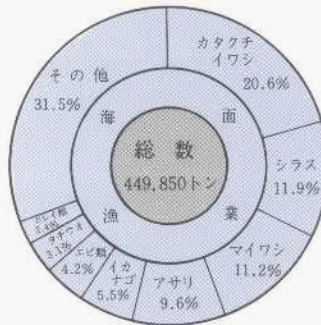
生産力が高いといわれる内海水域には多くの生物種が生息していて、販売される漁獲物の種類も約100種に及んでいる。このうちの重要な多くの種類、カタクチイワシ・サワラなどの浮魚類並びにマダイ・カレイ類・エビ類・ガザミなどの底生種の生態を明らかにする。これらの知見に基づいて、自然に行われている生物生産を有効に利用するための方策を追究する。その他、漁況予報を行い、栽培漁業の推進、漁業規制・漁業調整に関する提言、埋め立てなどの生物生産に与える影響調査を行っている。



瀬戸内海の小型機船底びき網(第3種)の網揚げ



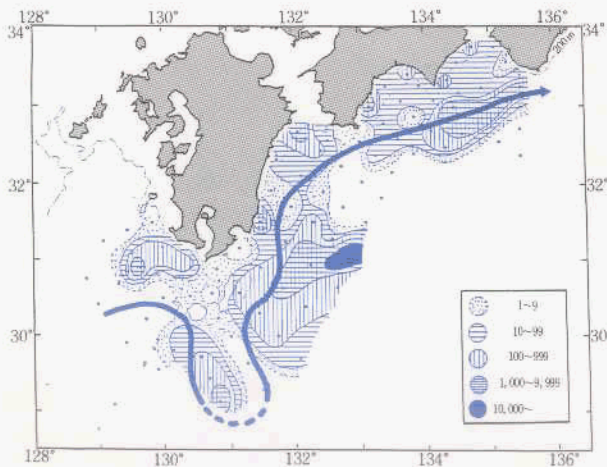
瀬戸内海の魚種別生産額比率
(昭和61年属人統計)



瀬戸内海の魚種別漁獲量比率
(昭和61年漁場別統計)

外海調査研究部

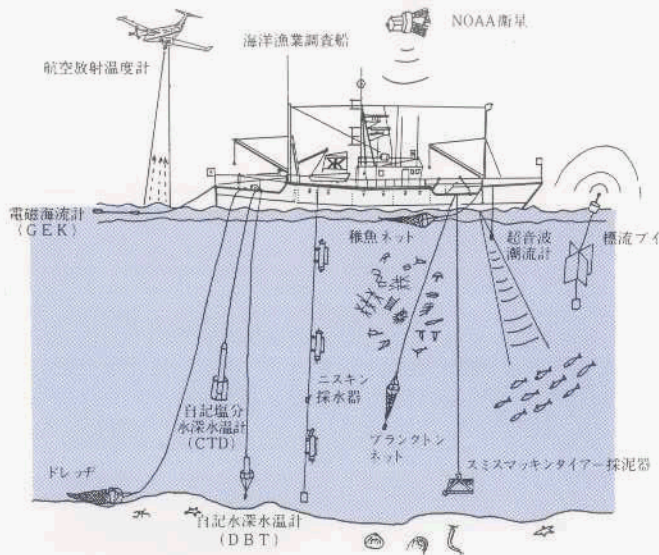
南西諸島周辺から九州南・東岸、四国、紀伊半島にかけての南西外海域は、黒潮の上・中流域に相当し、カツオ・マグロなど高度回遊魚の来遊海域である。また、薩南から潮岬



マイワシ卵の分布(昭和61年2月)、現在日本周辺のなかで最も大きな産卵場となっている。

に至る海域はイワシ・アジ・サバ類・モジャコなど沿岸性浮魚類の再生産海域である。浮魚類の分布、漁場形成及び資源変動(補給)は沖合を流れる黒潮が大きな影響を及ぼしているため、黒潮域とこの周辺海域の海洋構造、変動機構の解明及び黒潮の変動予測の研究を行っている。また、生物生産力を把握するため、栄養塩類の分布、季節変動、植物・動物プランクトン、バントスの分布、季節変動、生態、生産量などの研究を行

っている。南西諸島のサンゴ礁海域を含む外海域では、前記浮魚類に加えてタイ類・エソ類・フェブキダイ類などの底魚類や、エビ類、イカ類が漁家経営上重要である。これらの



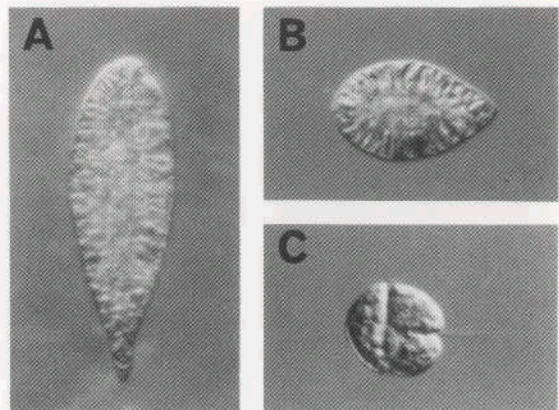
種について分布、回遊、成長など生物特性の解明、漁況予測、資源変動機構及び資源評価、資源管理などの研究を進めている。この海域でのマイワシの産卵量はわが国太平洋岸海域の90%以上を占めるとみられ、日本周辺海域での最も大きい産卵場であって、わが国太平洋岸海域のマイワシ資源動向を知る上で極めて重要な課題となっている。

黒潮調査研究官

黒潮流域の生物生産及び環境に関する調査及び試験研究に係る連絡調整、指導及び情報収集を行っている。

赤潮環境部

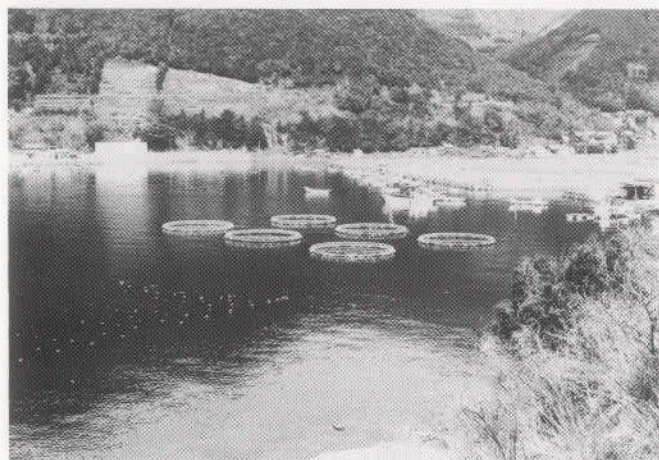
養殖業や漁業に大きな被害を及ぼす赤潮は特定種のプランクトンの異常発生によって起る。その機構の解明や被害を最小限に防止するための赤潮発生予知手法の開発研究は各方面から期待されている。瀬戸内海ではブロック12府県の協力を得て浅海定線調査が毎月1回実施され、富栄養化、貧酸素化、赤潮等の出現域や発生予知のための貴重な解析資料となっている。また、埋立などの増加は漁業や有用生物の生産に悪影響を及ぼすこともあるので、地域開発と水産業との調和が上手に図れるよう調査研究結果を総合評価して提言する必要がある。このように、瀬戸内海的环境と生物の変動の把握を行い最適漁場の維持と保全のために先導的基礎研究を行っている。



漁業被害を与える代表的な赤潮生物 (約460倍)

A: *Chattonella antiqua*, B: *Chattonella marina*,
C: *Gymnodinium nagasakiense*

資源増殖部



瀬戸内海を中心として沿岸域は、ハマチ養殖をはじめ魚介藻の増養殖に適した水域が多い。

有用魚介藻類の種苗生産と増養殖技術に関する研究、自然環境や増養殖環境下における生態と生理に関する研究、さらに、病気に関する研究などが主な基礎的研究である。このほかに、大型別枠研究(生態機構)、大規模砂泥域開発、ジーンバンク、雌性発生研究事業などの各種プロジェクト研究に参加し共同研究を進めている。また、ブロック内研究活動として、魚類(種苗生産、魚病各分科会)、介類、

藻類の3研究会を組織し、研究推進に必要な情報の交換と新技術の習熟に必要な研修を行っている。

調査船

調査船は、しらふじ丸(広島庁舎)・こたか丸(高知庁舎)の2隻が配置され、各種の海上調査及び観測に従事している。

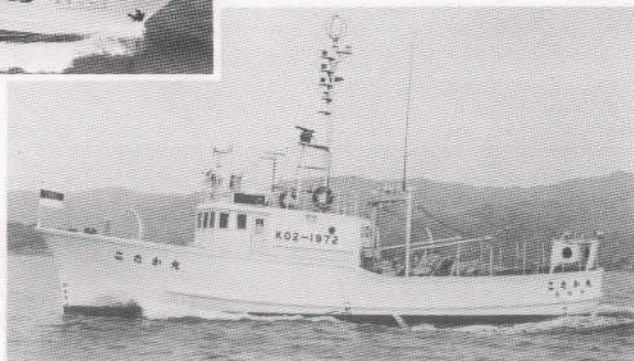


しらふじ丸(広島庁舎)

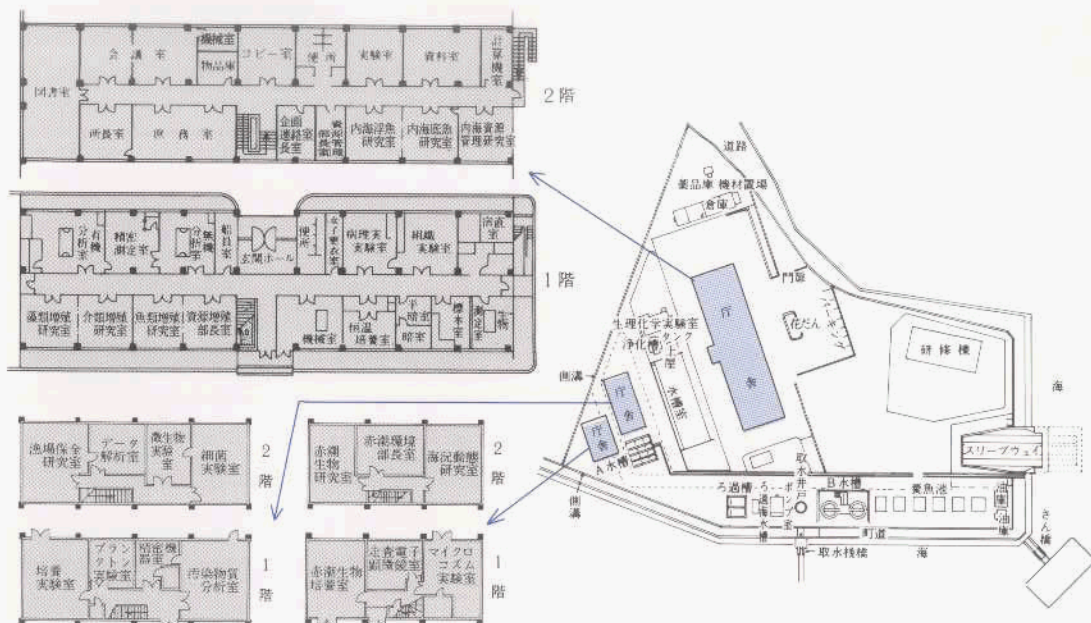
竣工 昭和58年3月
総トン数 138トン
全長 36.50m

こたか丸(高知庁舎)

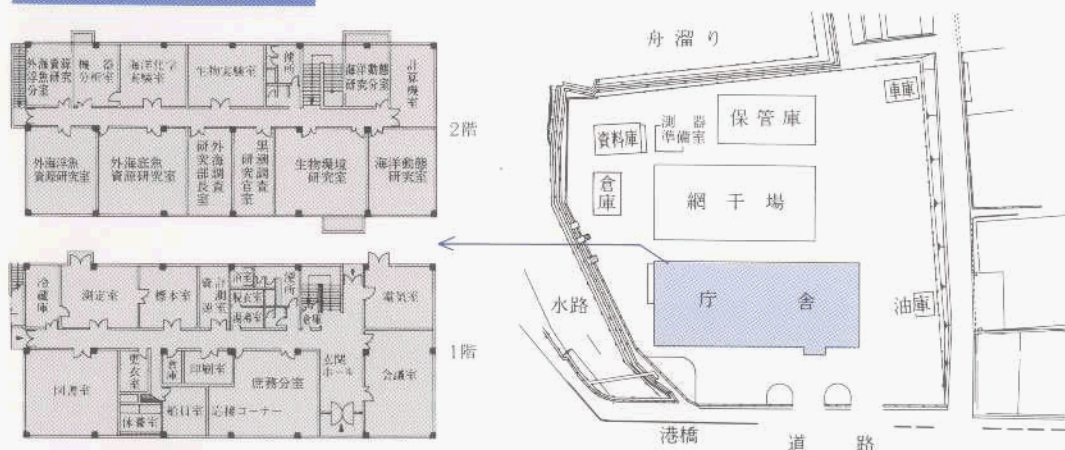
竣工 昭和47年3月
総トン数 47.48トン
全長 18.47m



広島庁舎見取図



高知庁舎見取図



主な刊行物

- 南西海区水産研究所研究報告
- 南西水研ニュース
- 南西海区水産研究所調査報告
- 南西海区ブロック会議内海漁業研究会報告
- 南西海区ブロック魚礁研究会報告
- 太平洋・中部南部沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計年報
- 南西外海の資源・海洋研究
- 南西海区ブロック海洋研究会報告
- 南西海区ブロック魚類増養殖研究情報
- 南西海区ブロック介類情報
- 南西海区ブロック会議藻類研究会誌



高知庁舎 〒780 高知県高知市棧橋通り 6-1-21

電 話 0888-32-5146 (代)

テレファックス 0888-31-3103

